

2021年度神戸大学文学部公開講座「病とこころ」

< 講義概要 >

10月2日(土) 13:40~15:10 藤澤 潤 准教授

感染症と冷戦：エイズをめぐるソ連国家保安委員会（KGB）の情報活動

この講義では、エイズをめぐる1980年代のソ連国家保安委員会（KGB）の情報活動について、ソ連・東欧諸国の史料をもとに検討します。当時、エイズ患者の増加を受けて、この未知の病に対する不安が世界中で強まり、それとともにHIVウィルスを作成したのは米軍であるといったデマが広がりました。一見すると、このデマは自然発生的なもののように見えますが、その背後にはKGBの暗躍がありました。KGBは、アメリカ政府に対する信頼を損ねるために、HIV米軍起源説の拡散に組織的に関与していたのです。本講義では、このKGBの活動を具体的に分析しつつ、社会不安が広がるなかで様々な情報とどのように接すべきかについて考えてみたいと思います。

10月2日(土) 15:20~16:50 酒井 朋子 准教授

パンデミックの中で考える現代社会の「ケガレ」観

唾液や血液など身体から出るものや死にかかわるものごとを「ケガレ」として忌避する行いは、病への感染を日常的にふせぐ習慣であり信仰であったとも説明されます。近代医療の考え方が広まった現在の日本社会では、かつての「ケガレ」観が薄まったようにも感じられますが、本当にそうなのでしょう。人類学では、社会秩序からはみだすものが「きたない」ものや「汚穢（けがれ）」と見なされる、とする理解があります。本講義ではこの考え方をヒントに、新型コロナウイルスの流行にかかわる不安や恐怖について考えてみたいと思います。

10月9日(土) 13:30~15:00 柳澤 邦昭 講師

コロナ禍と社会的孤立

人は社会の中で生きる社会的動物です。そのため、他者とのつながりを築き、維持したいという欲求があります。この欲求が満たされないと、こころの痛みが生じ、それが持続すると健康上のリスクを高めることも知られています。コロナ禍はまさしくこの欲求の満たされない状況ですが、極めて特殊なケースとも言えます。なぜなら、ここまで多くの人々が同時に社会的孤立に陥ることは人類史上初めての経験だからです。そこで、本講義ではコロナ禍における社会的孤立の問題について、社会心理学のアプローチから迫ってみたいと思います。

10月9日(土) 15:10~16:40 中畑 寛之 教授

露の世ながら - 理不尽な死を超えて書くフランスの作家たち

小林一茶からタイトルを借りたこの講義では、なぜ我々は子どもの死を書く（語る）のかをフランスの詩人や作家の作品から考察します。わが子の死、それは理不尽な死の最たる出来事だと思いますが、実のところ文学の大きなテーマのひとつでもあるのです。今回は19世紀後半に生きた詩人ステファヌ・マラルメと現代作家フィリップ・フォレストの二人を取り上げます。息子の死を直接的には作品化できなかったマラルメ、娘の死を描くことで小説家となったフォレスト、両者のテキストから理不尽な死と喪の作業を介して書く行為（エクリチュール）とは何か問い直します。